

開催地名	富山県 射水市
開催日時	令和7年1月18日(土)13:30～15:00
開催場所	アイザック小杉文化ホール ラポール
語り部	大峪 やす子(三重県紀宝町)
参加者	120人
開催経緯	令和6年能登半島地震を経験し、地域住民の防災意識の高まりを感じつつあるが、一方で自主防災組織の平常時の防災訓練や啓発活動、災害時の避難所運営や避難誘導の方法など活動の取り組み方が分からないといった声があった。災害時は、行政職員も被災者となり、現場に駆けつけることができないことも考えられるため、自主防災組織等の共助による地域防災力の向上を進めるため講演会を実施する。
内容	■ 自己紹介 大峪やす子氏は、2011年に発生した紀伊半島大水害において被災し、その後、地域の防災活動を主導してきた。災害を契機に自主防災組織を立ち上げ、防災意識の向上に尽力した。彼女の取り組みは、災害発生直後の対応から、地域全体での復興、防災力の強化に至るまで幅広いものであり、地域防災のモデルケースとなっている。その実践的な経験は、多くの人々にとって防災の重要性を再認識させる貴重な学びとなる。 ■ 紀伊半島大水害の発生 紀宝町は熊野川を有する自然豊かな地域であるが、2011年8月に発生した紀伊半島大水害により甚大な被害を受けた。この水害は、奈良県、和歌山県、三重県の広範囲にわたり発生し、熊野川の水位は観測不能となるほど上昇した。奈良県では総降水量が1814.5ミリに達し、これに加えて上流のダムからの緊急放流と豪雨の影響が重なり、9月3日午後には町内の堤防が越水した。これにより住宅街が広範囲にわたって浸水し、住民は突如として生活の場を奪われる事態となった。 ■ 災害後の支援活動 災害発生直後、紀宝町では「紀宝町災害ボランティアセンター」が設立され、全国から多くのボランティアが集まり、被災地の復旧支援に尽力した。ボランティアたちは、家屋の清掃作業や浸水した建物の水抜き作業に取り組み、住民が少しでも早く元の生活を取り戻せるよう支援した。 一方で、災害後の住民アンケートを通じて、避難所までの道路の冠水や防災無線の不備、ライフラインの停止による影響など、多くの課題が浮き彫りとなった。特に、情報伝達の遅れが住民の避難行動に影響を与えたことが明らかとなり、これらの教訓を踏まえた防災対策の強化が求められるようになった。 ■ 風水害対応タイムラインの導入 紀宝町では、災害対応の精度を向上させるため、2012年に国内初となる風水害対応の「タイムライン」を導入した。この仕組みは、「いつ、誰が、何をするのか」を事前に明確にすることで、災害発生時の混乱を最小限に抑えることを目的としていた。実際に2014年の台風11号の際には、タイムラインに沿った対応が機能し、住民の早期避難が促進された。この取り組みにより、町全体の防災体制が強化されるとともに、避難所内に授乳室を設けるなど、女性や乳幼児への配慮も進められた。 ■ 次世代を巻き込んだ防災活動 防災力の向上には、次世代の育成が不可欠であるとの考えのもと、大峪氏は地域の子どもたちを巻き込んだ防災教育を積極的に推進した。中学生を対象とした避難所運営訓練では、実際の避難生活を想定した役割分担が行われ、世代を超えた防災意識の醸成が図られた。また、小学生が炊き出しを担当し、中学生が救護班として活動するなど、実践的な訓練を通じて、地域全体の防災力を高める試みが行われた。 さらに、地域の防災意識を深めるために、子どもたちは「稲村の火の館」を訪れ、歴史的な防災事例を学ぶ機会を得た。この視察を通じて、過去の教訓を現代の防災対策に活かす重要性が

認識され、実際の地域防災計画に反映されるようになった。

■ まとめ

大峪やす子氏が展開した防災活動は、単なる災害対応にとどまらず、災害発生から復興、防災力の向上に至るまでの一貫した取り組みとして位置づけられる。個人の経験をもとに、地域全体の防災活動へと展開していった彼女の実践は、未来の防災のあり方を考えるうえで貴重な教訓となる。

防災は、過去の経験をもとに進化し続けなければならない。住民一人ひとりが自らの役割を理解し、地域全体で防災意識を高めることが、次なる災害への備えとなる。大峪氏の活動は、その模範となるものであり、今後も多くの地域で参考にされるべき事例である。



開催地より

今回、紀伊半島大水害の経験に基づいた防災訓練の実施方法やタイムラインの策定について、ご講演いただいた。来年度以降、本講演内容を参考に防災訓練メニューの多様化やタイムライン及び地区防災計画の作成を推進し、地域防災力向上につなげたい。